ゴールデン・モーメント

エルフェイム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゴールデン・モーメント

【Ｎコード】
Ｎ３４４６Ｇ

【作者名】
エルフェイム

【あらすじ】
サークルの部誌に掲載した作品を修正したものです。４人組のバンド「ゴールデン・モーメント」のヴォーカルをしているタクミは現在の状況に不満を持っていた。不満を心の内で処理しきれないタクミはメンバーにそれを表すが……？タクミがゴールデン・モーメントの一員としての自覚を一新するまでのとあるエピソード。

1

俺のいるバンドは一応、普通の一般的に人気のあるインディーズ・バンドだった。いわゆるビジュアル系ロックバンドだ。

でも、今は一つだけ他のバンドとは違う点がある。それは、とあるレーベルに採用されて、俺たちがそこに所属した瞬間にできた。その違う点は小さな事ではあるが、それによってこのバンドは異色中の異色とされてしまう事になった。

これでは、全く別の世界に住んでいるのと同じだと思う。バンドということすらおかしい気がしてくるし。

その違う点、とは――

【バンドの歌うジャンルが演歌】という点だ。

一応、補足程度に言わせてもらうが。決してレーベルに所属する前から演歌を歌うバンドだった訳じゃない。演歌はレーベルに所属してから歌うようになった。レーベルに所属する条件として演歌を歌う事となってたからだ。しかも、俺はまだそれについては納得してない。納得してなくても、やはり所属したいし、所属させてもらえるのなら、従うしかなかった。

今日も俺は演歌を歌うために楽屋に来ていた。今日はライブなんだ。

このバンドのヴォーカルをやってる俺は、準備する事が少ない。着替えて、メイクをして喉の調子を整えておくだけだ。だからちょっと暇をしていて、少し考え事をしてた。

もちろん、現在自分が歌わなきゃいけないジャンルについてなんだが。

「何で俺らは演歌なんかやってるんだ？」

思わず俺はぽつりと呟いた。思っていた事がポロリと口から出るのは、俺の悪い癖だとよく言われる。近くでエレキギターの調整をしながら歌詞を口ずさんでいる俺の相方、ヒロキは黙り込んだ。元

々ヒロキは寡黙な方だけど、気の許せる人とは話をしてくれる。俺の数少ないマブダチだ。他の二人のメンバーは気にせず自分の作業をしている。少し時間が経った後、ヒロキが口を開いた。
「きっと、お前の声が演歌に向いていたんだ」
その答えに今度は俺が黙り込む番だった。くそっ。

今回、俺たちは正式に全国デビューを果たす。今準備しているのはただのライブのためではない。これは重要なライブなのだ。でも、俺は演歌で生きていきたい訳じゃない。俺は、別に演歌が歌いたい訳じゃねーのに。不満げに俺がブツブツ言ってたら、それに気が付いた一人が振り向いた。
「メジャーで、音楽やれるんだから良いんじゃナイ？」
真っ先に演歌を吸収し、今はメンバーの中で一番演歌にどっぷりと浸かっているユカリが言った。そして自分が身につけているものを見せるようにぐるりと一回転をする。一瞬だけ、かんざしに目がいった。女だったら可愛いのにな。
「着物、キレーだし！」
ユカリはメンバー一、背も小さいし声も高い。どちらかというと『可愛い』タイプであるユカリは女の子受けが良い。女の子の中に居ても、不自然には見えない。とはいえ考え方は本当に、単純で明快だ。ズバッと言いたい事があったら言うし、俺みたいに悩む必要もない。ある意味男らしくて、羨ましい。
でも、ムカツク。どこがと言われたら、説明できねーけど。
「……お前の着物は、既に着物じゃねーよ」
仕返し代わりに、ぼそりと言ってやった。だって、ほんとーの事じゃん。
「そんな事言う、お前だって！」
ユカリは反論したけど、多分俺の衣装の方がまともだ。でも俺は

いつも通り、ヒロキに殴られるのだった。いや、もう慣れたし。痛いけど。

憧れのデビューのはずだが、あんまり嬉しくない。嬉しいハズなんだけど。素直には、やっぱり受け止められない。歌う曲が演歌だし。まぁ、衣装は普通のとは違って変わってるから目立つし、衣装で目立つのは嫌いじゃないから良いけど。

でも、俺たちはこれで認めてもらわないといけないんだ。このバンドとして、このライブを成功させないといけない。複雑な気分だが、歌が歌えるだけ良い。とその場凌ぎでしかないが、そう毎回自分に思い聞かせて歌う。今回はメジャー初の、ちゃんとしたライブって事になるんだから、しっかりと思い聞かせないとだめだ。とてもじゃないが、そうしないとうまく歌う自信がない。

そんな俺はバンドマンとして許されるのだろうか？それは誰も知らないし、分からないと思う。それに、他のメンバーだってそう言った事を心の中に少しは持っているはずだ。ただ、みんな心の中に上手に隠しているだけで。

そういう矛盾した心を隠して、俺たちはステージに立つ。俺たちにとって、歌を歌う事ができるのは、最高な事だから。

2

「お疲れ様。
観客の反応も上々で、なかなかの出来だ。
このライブは成功したと考えて良いだろう」
マネージャーをしてくれている元バンドマンの惺(さとる)さんが、無事に本番が終わって俺たちが楽屋で着替えている時にやってきた。このバンドについて言うと、本当はマネージャーなんか付けてもらえないレベルのバンドの気がする。けど、惺さんが好意でマネージャーをしてくれている。優しい人だ。そりゃ、バンドの出す音とかに関しては厳しいけど。
「ただし、まだまだこのバンドは無名と言っていい。
これからどんどん良い音を作っていって、もっと色々な人に聞いてもらえるようにしなければならない。
今回、成功したからといって自信を持ちすぎるなよ」
ほら。ちゃんと釘を刺す事を忘れない。流石は俺の尊敬する人物だ。そんな人がサポートしてくれてるから、俺は何とかやっていけているんだと思う。
「それから。
来月からライブツアーをする事になった。
このライブツアーは、このバンドの宣伝の役割を果たす。
今までにない様な刺激的なライブをして、各地で注目されるのが目的だ」
惺さんは決して俺たちのテンションを下がりっぱなしにはさせない。常に俺たちの創作意欲、歌いたいという想いを最大限に引き出そうとしてくれる。そこも俺が惺さんを尊敬する点だ。ただ、演歌を歌うという事への熱意が俺にないのが申し訳ない。俺たちがこのレーベルに所属する様になって、惺さんがマネージャーをしてくれる様になってまだ、半年くらいしか接していない。だけど、ボイス

トレーニングとかその他色々のトレーニングも直接みてくれる。基本的に彼は面倒見が良い人なんだ。そうしてトレーニングとかで接していて思った事だから、多分間違ってないと思う。
それにしても、来月からツアーって事は新曲も書かないといけねーって事か。何曲がノルマになるのか、この時点では知らされない。きっと後日だろう。俺は元々演歌に使えるような歌詞を書いていた訳でも、歌っていた訳でもない。だから、今の内に考えておかないと期限に間に合わなくなってしまう。俺が歌いたい事を歌詞として書いた後、惺さんが手直しをするから（惺さんは何でもできるスゴイ人なんだ！）結局演歌になってしまうとしても、俺が歌いたい事をベースに歌詞が作られていくから文句は言えない。俺の意思をちゃんと守ってくれようとしてくれる分、俺はそれに応えたい。
「俺たちのバンドは、これからだ。
頑張っていこうな！」
リーダーでもあるドラムのケイゴが言った。それに俺たちメンバーも同調する。
「よし！
このイカれた組み合わせのバンドを、これから全国に知らしめてやろーな」
「イカれてんのはお前だ！」
ケイゴにちょっと同調しきれなかったユカリと俺が叫んだ。お決まりの様に、やっぱりというか、何故か俺にだけヒロキの拳が飛んできた。痛い。

んで、今は恒例の打ち上げだ。俺たちはやっぱりライブでテンションが上がったままだから、バカ騒ぎをしてしまう。いや、元々頭は良くねーから、バカな事はよくするけどさ。
やっぱ、打ち上げはすんげー楽しかった。酒飲んで、バカ騒ぎ。

ただ、騒ぎすぎてちょっとヤバイかなって思う瞬間はある。でもさ、やっぱ騒ぎたい時は騒ぎたいジャン？結局俺はそこまではしないけど、ケイゴはよく一番盛りあがってる時に脱ぐ。脱ぐったら脱ぐ。別にそれはどーでも良いけどな。周りに人が居る時は止めて欲しいと思う。逮捕されたかねーもん。何度か、ショクシツ（職務質問）受けた事あるし。あれ、メンドーなんだよな。

でも、比較的俺のいるバンドは堅物な方だと思う。うん。あぁ、だけどきっと明日はほぼ全員二日酔いだ。みんなガバガバ飲みまくってる。

あ。惺さんも酔っている。わー……珍しー……。珍しいといえば、ヒロキも結構良い具合にできあがってる。やっぱ、デビューのライブが成功したっていうのは気分的にハイになるんだな。

レーベルの社長も、途中までこの打ち上げに参加してた。俺が思っていたよりもずっと良かったらしい。来月から始まるライブツアーが楽しみだと言っていた。そう言われたら、めいっぱい頑張らねーとな。

ライブツアーの打ち合わせで決まった事は、俺にとって衝撃的な事だった。いや、多分他のメンバーもそうだったとは思う。新曲、最低五曲だそうだ。俺は「普通に考えて無理だろ！？」と、思ったけど、言えなかった。……我ながら根性無し。代わりにユカリが「えー！」と言っていた。

そして来週から合宿があるらしい。合宿中に、歌詞を作れという事だろう。無茶苦茶な気がした。俺にそんな芸当が出来るとは思えない。

なんて、弱気にはなれない。寧ろ、その期間でやってやろうじゃねーか！という気になった。合宿中に出来るだけ多くの歌詞を考えるんだ。やってやる。どうせ演歌用に書き直されたりするんだ。好

き勝手書いちまえ。

そして当日。何日泊まるとかそんな事は一切教えてもらってない。きっと俺たち次第なんだろう。くっそー。いや、でもこの合宿という企画は惺さんが考えてくれたんだ。俺たちが内心では演歌に多少の抵抗を持っているというのを何となく知っているだろう人物でもあるし、惺さんがいてくれれば俺たちはどうにかなる気がする。

なんたって、俺たちは『片岡惺崇拝者』なのだ。マジで格好いいし頼れるから。バンドをやっていた頃なんか、インディーズ最大規模って言われたくらいなんだ。すげーだろ。

合宿する場所までは車で移動するらしい。大きい男四人がワゴンに荷物ごと詰め込まれた。運転手は惺さん。行き先は明かしたくないからだそう。何だか楽しみだな。他のメンバーもそうらしく、雰囲気が柔らかい。というか、うかれてる。

「ねぇねぇ、俺考えたんだけどさ！

夜はみんなで――」

「アホか。

そんな事してるほど暇じゃないかもしれねーぞ」

早速バカっぽいトークを繰り広げていた。俺はどんな場所に着くのかめっちゃくちゃ楽しみにしてんのに。おかげで昨日はあんまり眠れなかった！

「おいおい、これからトレーニングの為の合宿だっていうのに、そんなにうかれていて良いのか？

ほら、着いたぞ」

呆れ気味に惺さんが言った。高速道路を経て、山の多い県へと向かっていたようだったけど。俺は本当に山の中に来るとは思ってなかった。

「山……」

ぽつりとそれに気が付いたケイゴが呟いた。てっきり俺たちはどっかのスタジオくらいにしか思ってなかったんだ。みんなボーゼンとしてる。ただ一人を除いては。

「わー！

山、山だ～～～！！」

ユカリはやっぱり単純だった。そりゃ、『山』だし？開放的になった方が勝ちなのかもしれない。と思った俺も次の瞬間にはユカリと同じようにしていた。案外俺も単純なのかもしれない。

「すっげー！

俺、山なんて初めて来た！！

つーか、木がこんなに集まっている所ナマで初めて見た！」

でも、「あ。はしゃぎすぎたかも？」と思って惺さんをちらっと見たら、優しく微笑んでいた。これが惺さんの狙いか？

「みんな山に感激したみたいだな。

そうそう、この前選んだ靴を履きなさい。

これを履いたら荷物を持って」

この合宿に際して、変な靴をもらった。何かがっしりした靴だ。紐を結ぶのが結構めんどくさい。荷物は殆ど惺さんが準備したらしい。俺たちが準備したのは下着と自分たちの必需品だ。

「惺さーん。

荷物、これ全部分担して持って行くの？」

何やら引きつった顔をしたユカリが惺さんに声をかけた。惺さんはにこやかに答える。

「そうだ。

少し重いかもしれないが、これからの道のりはそんなに大変じゃないから、その荷物くらいなら持って歩けるだろ」

これからの道のりって何？とは惺さんの笑顔が怖くて誰も聞けなかった。ユカリでさえ、何も聞かなかった。すんげー嫌な予感がする。荷物の量は、半端じゃ無いと俺は思った。あー、何て言うか……惺さんの笑顔が悪魔の微笑みに見えてきた。

「準備出来たか？行くぞ」
そして合宿とトレーニングが始まった。

3

「いつまで歩くんだ〜？」
「休憩しよーよ」
歩き始めて時計では十五分くらいしか経っていないのに、ケイゴとユカリがそんな事を言い出した。これでも俺たちはバンドメンズだから、ある程度の筋力や体力、そして精神力を持っている。はずだ。だから、軽い坂道や階段を下るような木道？とかいう木の板みたいなので出来ている道を歩くだけなら楽に歩いて行けると思っていた。が、この大荷物だと辛い。でも惺さんの方が荷物多い気がする。俺たちの背負っているデイパックよりも一回り大きいそれに気が付いた俺は、さり気なく俺たちの分も負担してくれている惺さんを改めて尊敬した。
因みに俺は自然に囲まれている状態がとても珍しいっていうのと、それが思ったより心地良いっていうので結構余裕だったりする。隣を歩いてるヒロキも結構余裕そうだ。二人の言い分を聞いて、笑っている。
歩きながらだから表情は見る事が出来ないけど、惺さんが言った。二人にとっては地獄からの一言だっただろう。
「スタート地点から約一時間歩くと目的地に着く。
休憩なんかしなくても、普通に行けるから大丈夫だ。
安心しろよ」
俺とヒロキは、それくらいなら大丈夫そうだなとお互いに言った。が、ケイゴとユカリはそれぞれに悲痛なうめきを発した。やっぱりな。まだ四分の一しか歩いてないってのに、文句を言ってたんだから二人にはかなりきつく感じるだろーな。
「全く。あいつらは、この自然に囲まれているという状況を忘れているに違いねぇ。
こんなにすげー綺麗な景色を見ていながら、疲れたーとか言えね

ぇだろ？」
「それはごもっとも」
その様子を見たヒロキが俺に言ってきた。ヒロキも俺と同じように考えていたらしい。俺はその言葉に同意した。その後からは、歩きながらどの緑が自分好みだとかそんな事を話していた。あの二人は相変わらずぐちぐちと文句を言いながら歩いていたが。全く、本当にもったいねぇ事してるよなーって思う。

そうして、目的地に着いたのはぴったり一時間後だった。惺さんすげー……。
「うはー……っ
やっと着いたぁ…」
息切れを起こした、というよりも死にそうになったユカリが力なく呟いた。そんなに辛い道のりじゃなかったけどな。でも、辛いと思ったのはユカリだけじゃなくてケイゴもそんな感じだった。最後まで二人して自然を見なかったらしい。そんな二人に惺さんは苦笑気味だった。でも何も言うつもりはないようだ。そう言う俺だって言うつもりないけど。こういうのって自分で気が付くものであって、周りが教えるものじゃねーだろ。
「お前らな、もう少し周りを見た方がいいんじゃないか？
お前ら二人以外、誰もそんなにくたびれちゃいねーよ」
くたびれてるのはガキくらいだ。とヒロキがさり気なく言った。その手があったか。
「何でそんなに疲れたのか、考えてみた方がイイんでねーの？」
俺も言ってやった。同じバンドのメンバーと言えど、馴れ合っても意味ねーし。やっぱ、お互いに刺激しあえる関係じゃないとな。
「んなこと言われてもな。
寧ろお前達が疲れてないのがムカツク」

む…ムカツクかよ。あ、惺さんが笑ってる。しかも助け船を出してくれた。嬉しー。
「それは心の持ちようだぞ、二人とも。
そんなに疲れたくなければ、ちゃんと自分で考えて答えを見つけてみろ。
そしたら、明日からはウンと楽になるぜ」
結局、惺さんに言われたら俺たちは素直に従うしかない。例え立場は俺たちのマネージャーでも、俺たちにとってみれば尊敬の的であり、憧れの人なんだから。正に鶴の一声って感じだった。
一声かけられた二人は頭を抱えてしまった。何で分かんねーんだろ？簡単な事なのに。あぁ、簡単な事だからこそ分かんねーのか。
この後、俺たちはボイストレーニングをした。このバンドが演歌を演奏するといっても、完全なる演歌じゃないから全員で声を出す時もある。それに、この短期トレーニングでは当然のごとく、ギターとか持ってこれねーから、必然的に体力とボイス、そして歌詞作成とかになってしまう。流石に山の中だとは思ってなかったからギターとかドラムとかかさばる物はナシって言われた時「何でだ？」と思った。そりゃ、ミニシンセみたいなのは持ってきてるけど。とまぁ、ボイストレーニングが主体になることはしょうがない。でも、都会とは違う空気がいっぱい吸えてかなり歌いやすかった。都会って空気がかなり汚かったんだな。全然知らなかった。
「よし、今日はここまでだ。
あとは各自自由。だが消灯は九時だし、明日は三時に起きてもらう。
あんまり無茶はしないようにな」
「さ……三時！？」
流石の俺も驚いた。三時って、三時って？？
「何で三時かは、明日のお楽しみってトコだな」
「俺、今から寝なきゃいけねーかな……」
含みを持たせてにやりと笑う惺さんの側にはぼそりと呟くケイゴ

の姿があった。三時起きはヒロキにも結構堪えたらしい。よろけてる。おもしれー。

いや、俺だって起きれるか不安だけど。まぁ誰かが起こしてくれるっしょ。一人で起きれる自信は全くない。自慢じゃないし、自慢にならないけど。

そんなこんなで初日が終わった。うーん、精神的には大丈夫だったけど、明日筋肉痛になってたらすんげー嫌だなー。

4

本当に三時に起こされた……。俺たちは寝ぼけ眼で朝飯を食う。あぁ、惺さんだけは元気だなぁ。惺さんが用意してくれたデイパック――本当は登山用のザックらしいけどよく分かんなかった――と装備品一式を身につけさせられた。手で持った時はちょっと重いかもって思ったけど、背負ってみたらそうでもなかった。

「まだ暗いが、行くぞ」

惺さんにはそれだけ言われた。覚醒しきってない俺たちはぼけーっとしながら彼についていく。歩いている内に、だんだん俺たちの目も覚め、頭も覚醒してきた。と思ったら、誰かが転けた。

「うわっ！？」

俺じゃない。俺の直ぐ後ろにいたヒロキだ。よくよく見たら、木の根っこがでっぱってら。暗くてそこらへんは見えにくいんだ。俺も気をつけなきゃな。

その後少し歩いたら、休憩だと言われた。辺りはまだ暗い。俺は少し飲み物を飲んだ。勿論これはスポーツ飲料だ。動いていたせいか少し汗ばんできている。まだ涼しいのに。そういえば、筋肉痛にはならなかったみたいだと今頃になって気が付いた。まだ頭が寝ぼけているらしい。

ユカリは暗闇を歩いている事で少し不安になっているのか、辺りをきょろきょろと見回していた。何だか小動物を見ているようだ。ユカリはこのメンツの中で一番背が小さいから、かえってそんな風に見えやすいのかもしれない。

ここから山の頂上までは二時間くらいで着くと思う。と言われたけど、あんまりピンとは来なかった。山に登るとは聞いてなかったし。そんな心の準備もしてなかったし。ただ、鎖場とかいう鎖が岩に埋め込まれている様な場所があるからそこがきついかもしれないと言われた。これもやっぱ初めての事だからイメージが全然湧かな

い。一体鎖場ってどんな場所なんだ？
　二回目の休憩が来た時に、惺さんが教えてくれた事。休憩の時には、水分を取って甘いものを偶に口にすると疲れにくくなるんだって。ザックの中にはブドウ糖ってのが入っていたから、それを嚙ってみた。甘い。あと、暗くてあまりにも視界がきかなかった時には懐中電灯を使う事。使わないで転けた時、大変な事になるらしい。まぁ、そりゃそーだよな……。最後に、岩がごつごつしている所を登る時、重心を後ろにしない事。重力に従って落ちちゃうんだって。そんな急な所を登るのかと思うと少しぞっとした。
「休憩はなるべく三十分毎くらいに取れるようにするから、がんばれよ。
　なぁに、大丈夫だ。ご老体だってちゃんと登れる。
　それにここまで来たら、戻るのも嫌だろう？」
　惺さんは俺たちにそう言って、先に進み始めた。俺たちのテンションはまだ低い。今のところ、誰も一切文句を発してない。そうこうするうちに、岩ばっかりの所になってきた。足元がごつごつして歩きにくい。歩くというより、登るっていうような場所もあった。足だけで登りにくかったら手も使えと言われた。手を使ってみたら結構楽になった。すげぇ。
んで、鎖場というのに遭遇した。お、本当に鎖がじゃらじゃらしてら。
「これ、登るの？」
　ユカリがぽつりと呟いた。多分これ、俺も含めたユカリ以外の三人も思ってると思う。でっかい岩が斜めになってて、そこに鎖が付いてる。でっかい岩ってのは、鎖が付いてる面が平らであんまり凸凹してない。登れんのか？これ。
「何もそこを登らないといけない訳じゃない。
　この岩の横を登ったって良い。
　まぁ、見てろ」
　早速惺さんはお手本を見せてくれるらしい。惺さんは両手を使っ

て器用に登っていく。いや、これはマジですげぇ。カッコイイ！
「次、俺が行くっ！」
我先に、とケイゴが叫んだ。今のでテンションが上がったらしい。そりゃ、俺もテンション上がったけどさ。
ケイゴは気合いを入れて登り始めた。惺さんが登ってた時と違って、何か可笑しかった。あぁ、体重移動が変なんだ。ケイゴの次に登ったのは意外にもユカリだった。
「みんな登ってからだとさ。
怖くて俺、登れなくなっちゃいそうジャン？」
そういうユカリは、するすると器用に登っていった。ただ、その登り方を見ていた俺とヒロキはお互いの顔を見合わせてしまった。
「何か……ユカリの中にヤモリを見た気分だ」
「同感……」
ユカリは岩に身体全体をへばりつけるようにして登っていった。ユニークな登り方というか、すんごく独特だと思った。次にヒロキが登る。
ヒロキの登り方は普通だった。つまらん。鎖を持って身体を岩と垂直にするようにして登っていく。普通に歩いているように見えた。勿論俺だって普通に登ってやる。惺さんみたいに器用に恰好良く登ってやるんだ。
「よし、全員登れたな」
そ……それだけっすか。俺の登り方恰好良かったとかは……？
「ここから、ボイストレーニングしながら登っていくぞ。
まだ体力は持つだろう？」
衝撃が走った気がした。惺さんはにこにこしていた。やっぱりこれもトレーニングの内だったのか……！
「あそこら辺が頂上だ。

あと三十分くらいで着くぞ」
ほんの少しだけど明るくなってきて、空と山の境目が分かるようになった。俺たちは山登り自体初めてなのに、ボイストレーニングしながら山登りなんてやってたから、もうヘトヘトだ。そんな俺たちに気が付いたのか、いや多分気が付いていたけどまだ大丈夫だと思って放っておいたんだろうが。とある提案をしてきた。
「あと三十分はお前達の持ち歌を歌ってもらう。
インディーズの時のも含めてだ」
俺たちは多少ぜーはーしながらも、昔俺たちが作った曲とか全部歌うつもりで歌った。偶にメンバーの誰かが石とか岩に突っかかって転びそうになったけど、歌い続けた。ライブで歌いまくってる時よりも疲労が激しかったけど、何だか楽しかった。
それのおかげか、思ってたよりも早く頂上に着いた。でも、まだ少し明るくなったとはいえ暗くて景色は見えない。
「まだ時間はあるか。
お前ら、俺が止めろって言うまで歌ってろ」
少し休憩をとったら言われた。俺たちは言われたとおりに続きを歌い始めた。

5

「よし、止めて良いぞ」
その合図と共にぴたりと歌が止まった。歌い続けていたから、喉がカラカラだ。俺たちは四人とも飲み物へと手を伸ばした。そして一息吐いたのを見たのか、惺さんが言った。
「周りを見てみろよ。
何か思う事はねーか？」
俺は周りを見た。太陽が少しずつ顔を出し始めている。夜がだんだん追いやられていく。その攻防を示すかのように、夜と昼の美しいグラデーションがあでやかに輝いていた。雲は切れ切れになって光が俺たちの所に届くようにしてくれた。こんな光景は初めて見たけど、これが見事な朝焼けって奴だと思った。
「すげぇ……」
それしか言えなかった。他の三人もその景色に見入っていた。
「俺がお前らに見せてやりたかった光景だ。
満足のいく景色だろ？」
みんな素直に頷くしかなかった。それほどにこの景色は美しかったんだ。いつの間にか、惺さんは俺の近くに来て座っていた。そして俺にしか聞こえないような声で言った。最初から俺に言う事があって、そのつもりで来たんだろう。
「お前は、この景色を歌にするんだ。
歌にこの美しさを表現する。
この美しさを表現するにはどんな曲が適切だ？」
俺は迷わず答えた。
「ロックじゃ無理だ。
少なくとも、俺たちのロックじゃ無理だ」
俺たちが作ってきた曲をさっきまで歌っていた自分なら分かる。俺たちが歌うロックはこんな凄い景色を歌に、想いにして込める事

はできないって。少なくとも、それが出来る可能性を持っているもの。それは――

「これを表現するんだったら、俺たちのロックじゃなくて……

俺たちの演歌の方だ。

俺たちが歌う演歌の方がよっぽどイイ曲が作れると思う」

俺の言葉に満足したのか、惺さんは頷いた。俺は静かに惺さんが言葉を紡ぐまで待った。さっきよりも、もっと周りが明るくなって、周りの山々まですっきりと見えるようになってた。何て壮大な景色なんだ。コンクリートの環境なんかとは全然違う。これこそ生きている環境だ。そう思った。

「だろうな。

俺も、お前らのロックではこの景色は表現できねーと思う。

お前らの歌が下手なんじゃない。

ただ……ちょっと違う感じがするんだ。

この雰囲気とは、な」

惺さんが言っている事は、珍しく抽象的で分かりやすくなかった。けど、ニュアンスとしては理解出来た。

……早くこの景色を歌に記憶したい。惺さんはそんな俺に気が付いたのかにやりと笑った。

「やる気、出たろ？

このバンドで演歌を歌っていく」

「……うん」

この時、今まで「何で演歌なんか」と思っていた自分が心底嫌だと思った。コンクリートだけを風景だと思っていた自分には、この景色は美しすぎた。コンクリートに囲まれた、生きていない風景を相手取るならばきっとロックで俺たちも行けるだろう。でも、俺はコンクリートよりもこの自然が良いと思った。

別に「これじゃなきゃ！」とか思った訳じゃない。ただ……この風景が、かなり衝撃的だったんだ。何で今までこんなに素敵なものを見た事がなかったんだろう？って思うくらいだ。

ふと、他のメンバーはどうしているかと気になった。他の奴らも、俺と同じような状態だった。魅入られたかのように、景色を見つめ続けている。
朝焼けと呼べるあの奇跡的な時間が終わった。俺たちの上には、昼間のような精錬とした青い空が広がっていた。

「こういう所で食う飯って本当にうまいんだな。
あーゆーのってデタラメだと思ってた」
ぽつりと二回目の朝飯？みたいなのを食ってたケイゴが言った。ケイゴの言った事に俺たちもその通りだと反応する。俺の場合、デタラメとまでは思わなかったけど「気分の問題じゃねーの？」とかは思った事がある。でも。
「うめー…」
「食べ終わったら、もう少し休憩してから帰るぞ」
笑いながら惺さんが言った。俺たちはビックリした。
「えっ、夕陽は！？
夕焼けは見ないで帰んのか？？」
みんな同じような事を考えたらしい。そりゃ、こんな綺麗な朝焼けを見て、夕焼けが見れないんじゃ何か悔しいジャン！
「……あのなぁ。
お前ら疲れているだろ？
夕方までここでぼけーっとして夕陽が落ちた後に下山なんて、言っとくがかなり無謀だぞ」
「行きは大丈夫だったじゃんかー」
それを言ったら、惺さんは完全に呆れてしまったらしい。
「山は、降りる時の方が大変なんだぞ。
登りよりも疲れるから、覚悟しておけよ」
「覚悟……」

そうだった。朝は寝ぼけながら山の中腹くらいまで来てしまったから楽だったんだ……。結局俺たちは惺さんの言う事を聞く事にした。多分、それが懸命な判断だろう。

普通の登山客が登っている頃に俺たちは下山し始めた。だから、結構いろんな人とすれ違った。すれ違う時には、挨拶をするのが登山者間の礼儀みたいなものらしい。やっぱり挨拶ってのは大事だって事を実感した。行きとは違って周りの景色が見えるのが嬉しかった。行く時はライトの明かりだけだったもんなー。

「うわー、こんな所降りれねー！！」

「無理、無理無理無理」

ケイゴとユカリの声が聞こえてきた。木道とか、ちょっと歩幅が合わなくて歩きにくいなとか思っていたから岩とかになって少しほっとしていた時だった。

今朝俺たちが突破した難関。鎖場に戻ってきたのだ。登った時はそうでもなかったけど、今見ている眺めは正に

「小規模な崖みたいに見える……」

「つか、ぶっとい滑り台みたいな岩があると言う感じだな」

俺とヒロキが口々に呟いた。何だか、ちゃんとあの山小屋まで戻れるのか不安になってきた。ニュースとかになってないから、きっと今までの人達は降りれたんだろうけど。実際に自分が降りるとなると恐怖が……。

「怖ければ、尻を岩につけて少しずつ降りていけばいい。

こんな感じに降りれば確実に安全だぞ」

またもや惺さんが見本を見せてくれた。これなら俺でも降りれそうだ。

「俺が最初に降りる」

まず尻を岩につけて、手を後ろにつく。んで足を下に少しずつ降ろして……――

「んぁっ！？」

滑り落ちた！少しずつ降りるどころか滑り台みたいに滑ったぞ！

見事に落ちたぞ！？
でも、別に大したことも無くて普通に着地した。何でだ。何で滑ったんだ。怪我しなくて良かったは良かったけど、俺には事情がいまいち飲み込めてなかった。近くにいた惺さんを見上げたら、大笑いしていた。
ん？大笑い……？
「おいおい、何も滑って降りることは無いだろ……っ」
不思議がってる俺以外の全員が大笑いしていた。なんつー失礼な奴らだ！！
他の三人は結局普通に降りれたり降りれなかったり。降りれなかったのはケイゴだ。尻をつけるのが嫌だったらしくて、岩の横にある細い所を使って降りようとして岩と岩の間に足が挟まった。その時の焦りようが何とも面白かった。

6

本当に登る時よりも降りる時の方が辛い。ぎゃーぎゃー騒ぎながら降りてきてたからかもしれねーけど、体力がかなり減ってる気がする。あと、何か膝がガクガクする。岩が自然の階段みたいになってたり、木道の階段とかがあるんだけど、それを降りるたびに膝がカクンッってなる。しばらくの内は、俺たちは周りを見ながら「これなんだろ？」とかやってたけど、今はそんな余裕すらなかった。みんな黙々と脇目もふらずに歩いていて静かだ。俺たちが歩く音だけが、聞こえてくる。

偶に平らに近い所とかに出る。そこを歩く時、かなり楽だから嬉しい。太陽が上に上がって気温が少し高くなったから、汗も結構かいてる。でも信じられねー事に、俺たちは全員長袖を着ている。というか、着させられた。しかも腕まくりとか、脱いで下に着ている半袖だけになろうとしたらこう言われた。「日に焼けて肌が浅黒くなるぞ」と。それは避けたい事態だった。特に俺とユカリは。俺とユカリは女装要因的な存在だから、肌が浅黒いとかありえねーと思う。それに、俺とユカリは元々肌が白い方だから日に焼けたらかなり目立つ。それだけは避けたかった。ライブに支障が出るじゃないか。綺麗が売りのメンバーが浅黒くなってたら、俺だったら嫌だね。少なくともガッカリする。結構、見た目だって重要だ。

「惺さぁぁん。少しで良いから休憩させてよー

俺、膝がガクガクするし喉も渇いたー」

そう言うユカリの声がした。あぁ、やっぱ膝って結構くるんだな。俺だけじゃなかったと、ちょっと安心した俺だった。惺さんはその様子を見て、笑った。

「じゃあ、あそこに休憩場所があるからそこで休もう」

「ちょっと遠くなーい？」

少し不満そうなゆかりの声がしたが、気のせいだと惺さんに笑い

飛ばされていた。まぁ、あの距離なら何とかなるか。多分三百メートルから五百メートルって所だろう。
本当を言うと俺は休憩もしたいけど、それよりも早く山小屋に戻りたかった。早く山小屋に戻って詩を書きたい。何か、良いものが作れそうな気がするんだ。

休憩場所って惺さんは言ってたけど実際の所は、展望台みたいな感じだった。テーブルとイスが揃ってて、そこに座ると綺麗な景色がじっくり見えるという奴だ。
じっと座っていると、風が俺たちの周りを踊っていった。
「すげー気持ち良い風ー……」
そう俺は思わず、その瞬間に呟いた。通り過ぎたと言うよりは、本当に踊ったって感じだった。みんなも同じ感じだったみたいで、爽やかな顔をしてた。
「このままここでお昼寝したくなるね」
ユカリが呑気にそんな事を言い出した。確かにそういう事がしたくなる様な場所だった。あ、ヒロキがあくびをした。それを見た惺さんは笑った。惺さんの笑顔率が、合宿に着てからかなり上がっている。
「自然は良いだろ？
コンクリートなんかより。
俺はバンドメンやってたが、ガキの時は親にこんな感じで山によく連れてかれたもんだ。
だから、今だに山に対して思い入れがあるのさ」
惺さんが楽しそうなのはそういう事があったんだ。いーなー……。
俺は気が付いたら親父が死んでて、母さんは今、親父に次ぐ良い旦那を見つけて幸せそうだ。俺も彼は良いヒトだと思う。だから、これといって記憶にしっかりと刻まれている家族旅行ってなかったり

する。
「あ、でもこれだって家族旅行みたいなものか…」
「ん？
家族旅行？？」
つい口に出てたらしい。惺さんが不思議そうに言ってきた。
「俺は家族で旅行した記憶がほとんどなくて、惺さんが羨ましいなって思ったんだ。
でも、このトレーニングも家族旅行みたいなものかなって。
毎日一緒に過ごす、大切なメンバーじゃん？」
そう思ったんだと、言ったらみんなが少し照れていた。言っておきながらなんだけど、俺も恥ずかしい。
「まぁ、俺らがいっからな」
「そうそう。
俺たちがいるからタクミは彼女できないんだから。
感謝してよねー」
折角ヒロキが俺に言ってくれた事を、台無しにする様な言葉をユカリが言った。それがユカリなりの心遣いなんだろう。……多分。
悲しくなるからそう思いたい。
「そういや、あの騒がしい男がやけに静かだな。
……ん？
何だ、寝てんじゃん」
俺はケイゴの顔を覗き込んだ。話に乗ってこないと思ったらすっかり夢の住人になっていたらしい。幸せそうに眠っている。
「アレ、どーすんのー？？」
呆れ顔でユカリが惺さんに聞く。惺さんの代わりにヒロキが答えた。
「このまま放っておけば良いんじゃね？
バカには良い薬になるだろ」
え。帰ってこなくなりそうじゃん、それじゃ。夜になっても、このままじゃ寝ていそうだ。

「いや、可哀相だが起きてもらうよ…」
苦笑気味に惺さんは言った。その判断にヒロキは不満があるみたいだった。でも、俺は賛成だ。本当に帰って来れなくなったら大変だ。
ヒロキがぼそりと言った。
「えー、置いてったら面白そーなのに……」
そんだけかよ。その言葉が聞こえていたらしい惺さんは呆れ顔になった。そりゃあそうだ。ドラムのケイゴが欠けるだけでもかなりの痛手だ。
「起きろケイゴ。起きねーと、山小屋に戻れなくなるぞー」
一番近くにいた俺が早速声を掛けてみた。何回声を掛けても無反応で、俺が少し困っていたらユカリが近付いて来た。ため息を吐いているが、目配せをしてきた。自分に任せろって事らしい。俺が黙ってその場をどくと、ユカリがそこに座った。
「……」
おもむろにユカリは両手をケイゴの方へ差し出した。そして、ガシッとケイゴの鼻をつまんで口を塞いだ。
「え」
見守るだけの俺たちは目が点になった。何してんだ？ユカリの奴。ケイゴの耳元に何かを囁いているが、俺たちには聞こえない。一番近くにいる俺が聞こえないんだから、それより遠くにいる二人には聞こえてないだろう。
すると、ユカリが鼻と口を塞いでいた手を放した。ワンテンポ遅れる様にしてケイゴが起きた。すげぇ。
「お…お前、俺を殺す気か……」
「何のハナシ？？」
しらを切るユカリに顔面蒼白のケイゴ。ずごく懐かしい光景だ。久々に見るなぁ、あぁいう二人。
「休憩は終わりだぞ。早く降りよう。
寝るのは山小屋でゆっくりできる」

惺さんはケイゴに向かって言った。ケイゴは軽く背伸びをして立ち上がる。長い休憩が終わって再び俺たちは歩き出した。

7

「あー疲れた！！」
「気分は最高だったけど、疲れた～」
やっと山小屋に戻って来た。やっぱ疲れたと騒ぐのは昨日と同じでケイゴとユカリだった。
「風呂に入れるようになったら直ぐに入って汗を流せよ。体もしっかりマッサージしてほぐす事。
今日は昨日より楽しかっただろ？
だが、その分気が付かない所で相当疲れてるはずだからな。
明日筋肉痛がひどくならない様にしろよ」
俺たちが何もしないで寝そうなのを見越したのか、惺さんはそう言った。俺たちならそうなりかねないのが困った所だ。少なくとも俺は、この後ごろごろと寝っ転がって作詞に専念するつもりだった。惺さんは何でも俺たちの事はお見通しみたいだ。
自由時間は作詞に専念しよう。ちゃんとマッサージも忘れずにするけどな。

消灯時間直前に一曲できたから、早速惺さんにみてもらうことにした。消灯時間直前といっても、山小屋の消灯時間だから9時だったりする。最初聞いた時はびっくりしたけど、朝食の時間を聞いて納得した。朝食の時間は6時だったんだ。とまあ、そういう事だから、消灯時間といっても非常識な時間ではないと思う。
コンコン
「惺さん」
「タクミか、入って良いぞ」
許可が出たから室内へと入る。部屋割りはユカリとケイゴ、俺と

ヒロキ、そして一人部屋に惺さんて感じになってる。本当は全員同じ大部屋になるはずだったんだけど、今は客が少ないらしくて部屋数に余裕があるって事で別々にしてくれたんだ。山小屋の人も、気が利く。流石って感じか。

「惺さん、取り敢えず一曲だけできたんだけど。

見てくれる？」

「ほう、早いな」

そういうなり惺さんは俺が書いた詩を読み始めた。この確認作業が終わったら、演歌っぽくない不自然な所を直す作業が待っている。特に俺の場合、中々今までのジャンルから抜け出せなくていつもかなり手直しをさせられる。悔しいけど、書けない俺が悪んだから仕方がない。　惺さんが詩を読んでいる最中、俺は暇になるけど黙って待つ。二分くらい経って、詩を読み終わったらしい惺さんが頭を上げた。

「タクミ、書く気になればちゃんと書けるじゃないか。

この詩ならそんなに手直ししなくても大丈夫そうだ。

ちょっとこの部分を――こうしてやれば、もう完璧だぞ」

いつになく嬉しそうに惺さんは説明してくれた。ちょっと日本語がおかしかったらしい。いっぱい手直しが待ってると思ってた俺は、ちょっとボーゼンとしてしまった。

「手直し、それだけでいーのか……？」

「なにボケっとしてるんだ。

俺が大丈夫だといったら大丈夫なんだよ」

そう言って優しく俺の頭を撫でた。

「良くできたな。

お前、演歌なんか歌いたくねぇって思ってただろ。

だからこれからもこのバンドでやっていけるのか、俺は少し心配だったんだよな。

まぁ……この詩をみるかぎり、もう大丈夫そうだ」

「……うん」

「吹っ切れたみたいで、安心したよ」
俺がこのバンドで演歌を歌っている事に、いまだに強い疑問と反感を持ってた事を惺さんは知ってたらしい。結構みんなにはバレてねーと思ってたんだけどなー。やっぱり惺さんには敵わねーや。
「突然、レーベルが採用してくれるって言ってきてくれたのに、その条件が『演歌を歌う事』じゃなぁ。
俺も最初は驚いたぞ。音を聞いてから納得したけどな」
面白そうだったから、マネージャーになりたいって言ったんだ。と続けた。マネージャーができた経緯ってそんなもんなのか。まぁ、大した理由じゃないって思ってたけどさ。
「元々ロック系なのに演歌になるなんて、普通に無理だと思ったからサポート役にやってやろうと思ったんだ」
「じゃあ、この合宿って俺たちの演歌を歌う意欲を引き出すために企画されたものとか……？」
俺が何となく、言ってみたら頷かれた。一体この人はどこまでスゴイんだろーか。
「惺さん、ありがとっ！
俺さ、ここに来てホント良かった。こんな経験した事なかったから、何て言えば良いか分かんねーけど……」
俺は一息吐いた。そして、ちゃんと惺さんの目を見た。惺さんは優しく微笑んでいて、俺が次に何を言うか待ってくれている。
俺は、自分でも分かるくらいすがすがしい気分で言う事ができた。きっとサイコーの笑顔だったと思う。
「俺、演歌で頑張ってくよ。
この世界で、ちゃんと胸を張って生きてく」

この合宿は、結局一週間だった。一週間かけて周りの山に登ったり、あちこちハイキングしたりしながら楽しくトレーニングをした。

山に登るから体力も付くし、これは良いトレーニング法だと思った。飯はうめーし、山小屋はキレーだし、空気もサワヤカで俺たちはもっと居座りたいくらいだった。何より、自然に囲まれているってのがサイコーに幸せな事だと俺は思えるようになっていた。歌詞は、ちゃんと五曲分完成した。演歌も、来月のライブツアーでは自信と誇りを持って歌えると思う。今までみたいな、その場限りのテキトーな歌は、もう歌わない。そう決めた。

「なぁなぁ、惺さん」

「ん？」

「また、機会があったらこうやって俺たちの事山に連れてってよ」

俺は、東京の近くまで戻ってきた所で一応おねだりしてみた。だって山にいた方がここにいるよりも、良い歌詞とか作れる気がするんだもん。ヒロキも「それ良いな」って言ってくれた。ユカリとケイゴも笑顔だったから、多分賛成なんだと思う。

「じゃあ、ライブツアーが成功して時間が取れたらって事になるが……

また連れてってやるよ」

その言葉を聞いた途端、叫び声が上がった。ケイゴだ。

「うっしゃぁぁぁ！

山って気分転換にちょーどイイし、また来てーと思ってたから頑張ろうな！！」

ケイゴは意外にもかなり山を気に入ったらしい。女の子大好き、酒も大好き、暴れるの大好き、お祭り事大好き、な奴だったのに。

「ライブツアー、成功するのは確実だから。

惺さん、早く場所とっておいてね」

ユカリまで、山にとりつかれてたらしい。何か、目が輝いてる。

このバンドメンバーは全員、山が大好きになった。何か変な感じだ。都会っ子な俺たちが演歌歌って、山が大好き。でも、多分これが俺たちの本当の姿なんだ。

俺たちは今日も演歌を歌う。楽しそうに、心を込めて大切に歌う。

いつかみんなにも、大切なものが見つけられるよーに。

ライブツアーが成功したから、惺さんがちゃんと約束を守ってくれる事になった。今度行くのは天狗岳だってさ。調べてみたら、この前の合宿で登った山よりかなりきつそうだった。まだ誰にも教えてねーけど。きっと、ユカリかケイゴあたりが「こんな話きーてねーよ！」とか叫ぶんだろう。楽しみだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3446g/

ゴールデン・モーメント

2010年10月8日16時00分発行